

第14回事故対策会議 報告

労山大阪府連教育遭対部長 中川和道 20171211

第14回事故対策会議が11月8日(木)19時から連盟事務所で開催され、12の会から19名(末尾参照)が参加され活発な討論が行われた。冒頭、大阪府連 高橋明代事務局長から「事故対策会議は事故の当事者や当事者に近い責任者が一堂に会して経験を語り合い教訓を探しあうことによって事故を減らしていく会合で、事故当事者の不明や欠点を攻撃する 吊るし上げ的な会議ではなく同じ場面に自分が立ったとき事故を避ける判断の分岐点がどこにあったのかというヒントを探り教訓を学びあう会議にしていこう。事故とヒヤリハットはみんなの財産である。責任追及は目的ではない」との前置きがあった。続いて中川から2015年3月8日第53回OWAF総会決定を引用しつつ「大阪府連での重大事故の定義は(1)自力下山できなかった事故、(2)勤労者としての観点から後遺症が残った事故。山行の実施主体が中心となって総括文書をまとめ再発防止に特段の姿勢で取り組む」が紹介された。本日はヘリ救出事故2件について当該の会や当該のパーティーでの総括会議・文書を踏まえての報告を期待する、との発言があった。

当日は大阪労山ニュース2017年1月号に掲載の事故一覧からNo.8, No.9, 6月号のNo.2, クライミング事故として1月号のNo.12、6月号のNo.1とNo.3の順でレポートに基づいた報告のあと、中川の司会でひとつずつ順に議論していった。以下、概略を述べる。

No.8 No.9 2016年8月5日10時15分頃 MK(女性)74 TM(女性)80 豊中勤労者山岳会 越後三山 中ノ岳-越後駒ヶ岳間、「檜廊下」手前 1866m ピーク付近。MKは疲労、熱中症、脱水症で歩行困難となり救助を要請。新潟県警のヘリにより魚沼基幹病院に搬送され熱中症・脱水症との診断で点滴。TMは前日の8月4日、嘔吐・下痢が激しく、その後も食欲不振で食事がとらないまま少量の水分のみで行動していて脱水状態にあると思われたので救助を要請。新潟県警のヘリにより、魚沼基幹病院に搬送された。傷病名:脱水症。

リーダー作成の3ページレポートと地図1枚にもとづいて報告がなされたがパーティーとしての総括会議がなされておらずメンバー2名がレポートを把握していなかったため参加者も共に内容を分析することになり、これが反省点としてまず指摘された。3名で8/2入山。8/3千本檜小屋を3時に発ちコースタイム12時間の予定で中ノ岳避難小屋を目指したが到達できず避難小屋2時間手前で20時ビバークとなった。実行動17時間。8/4に中ノ岳避難小屋に入り泊。TMは下痢嘔吐。8/5避難小屋5時発で駒の小屋をめざすがMKが登山道を踏み外すなどふらつきが見られ危険なので10時頃ヘリ救助要請。3人もヘリで搬送。

会議ではまずコース選定について議論され、地図ではいわゆる「点線ルート」でありコースタイム12時間はハードルが高いが勝算をどう見込んでいたのかとの質問が出された。2名からは(1)岩稜歩行やポッカトレに励んだこと、(2)リーダーに食料などを担いでもらったことなどが報告された。ところがその食料が食べ慣れていないインスタント食品で下痢嘔吐

の原因となった（TMは今年同じコースを再挑戦したが食料を改善し良好な結果を得たとのこと。この根性には感服の声もあった）、さらに岩稜歩行やポッカトシは結果として大きく不足していたなどが述べられ、ではどうすればいいかとの議論となった。会場からは、この山にこの時間内に登ればどの山が登れるという目安をもった日常登山の実践例が紹介された（泉州労山のダイトレによる体力分類など）、また、8/3に持参した水の量（3人で合計6リットル）の不足も指摘された。

再発防止策など、パーティーとしてもっと教訓を引き出し議論し深めた報告を期待するとの意見がすくよくよ出された。

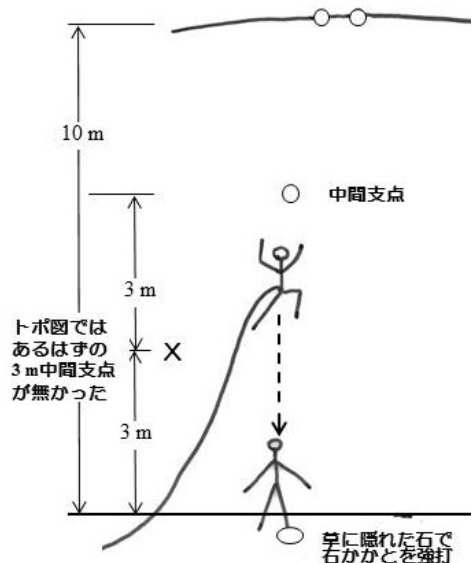
No.2 2017年1月28日13時30分 AS(女性)69 山の会カランクルン 但馬山地 鉢伏山 ハチ北高原スキー場 急斜面で転倒し、左ひざを強くひねった。強い痛みで自力では起き上がれず同行者に起こしてもらいスキー板を外して何とか自力で下山した。病院受診しMRI検査の結果、前十字じん帯断裂と診断された。

1ページの資料をもとに報告。実は急斜面ではなかった。初心者より少し上のレベルでありボーゲンで何とか下りられる程度。自分のスキーではなくレンタル。調整はていねいになされていたものの、湿雪が靴底に付着ししやすい状態で、ビンディングが正常に作動しなかった可能性がある。再発防止策は、(1)こけ方の練習を、(2)ビンディングをよく調整し靴底の雪をよく払って装着すること、

No.12 2016年10月29日10時頃 HY(男性)52 大阪ぼっぼ会 兵庫県古法華自然公園 古法華の岩場 フリークライミングルート上での事故。1ピン目に支点ランナーを取る前に落下。約4mの高さから両足を地面に向けてきれいな姿勢で着地したが、右足かかとが石に接触し右足踵骨骨折。

2ページのレポートと7枚の写真を投影しながら報告。10mの大岩の下から約3mにトポ図ではあるはずの中間支点が無かった、まさか落ちるとい認識がなかったので6mの第1ピンまで登ったがその途中で左足がスリップしてグランドフォールした。草に隠れた石で右かかとを打ち骨折したとのこと。

会場からは、まさか落ちないはずという落とし穴にはまった自分の例がいくつか出され、落ちること前提で行かねばという雰囲気共有された（分かってはいても難しいのだが・・・）。この場合の対策としては、(1)支点を自分で打つ、(2)マッ



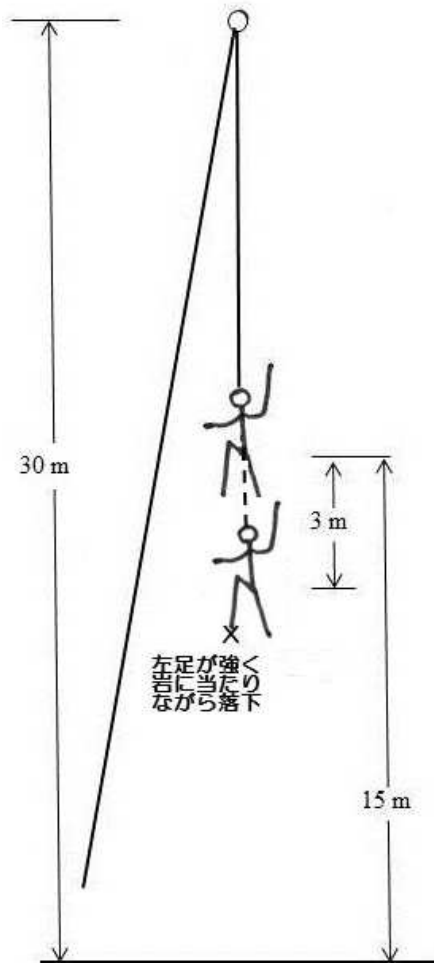
トを敷く、などが議論されたが、高さ 10m はボルダリングエリアではないのでマットではない対策が必要との発言がなされ、一同、うなづきあった。

議論では、近年中間支点を撤去する「運動」に行き過ぎが見られ冬の登攀者を排除するように思われるとの指摘がなされ、登山界全体の合意をどう形成すべきかなどが話し合われた。近郊の岩場などで中間支点だけでなく確保支点までも撤去して岩場を初登攀以前に戻して「初期化」し、それを楽しむトラッドクライミングの有意な流れがあること、御在所岳藤内壁などでその流れが顕著に感じられることなどが報告された。

No.1 2017年1月3日15時45分 SK(男性)56 泉州勤労者山岳会 姫路氏別所 桶居山(247m)西峰 御着岩南面 ルート「スベルロンガ」5.10B 40m

上記のルートをトップロープで登り、スラブに乗り込むさい、適当なホールドが見つからず、思い切って乗り込んだところ、左足が滑って墜落した。そのさい、左足つま先が岩壁に着き、ふくらはぎが伸びるように足首が曲がり、筋肉に損傷を与えた。トップロープのため、3m程度の落下で支えられたので、それ以上のダメージは受けなかった。傷病名は左足ふくらはぎ皮膚表面筋肉断裂。

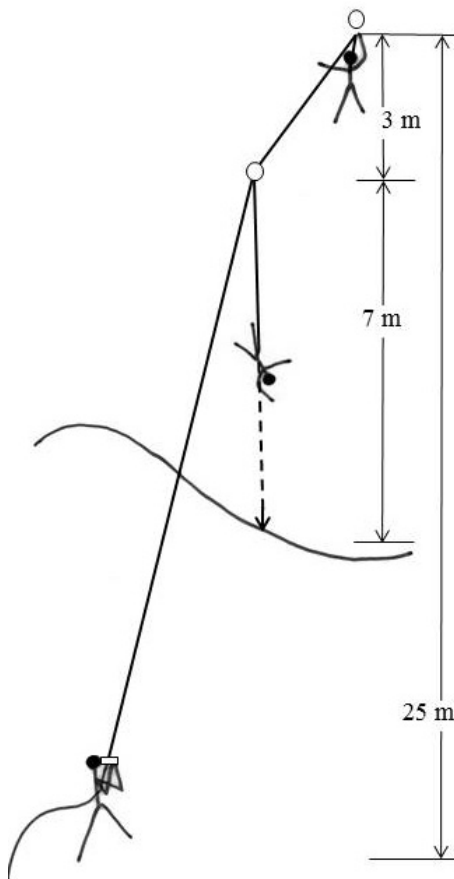
5ページのレポートではその場の体調把握、確保技術の習熟度、などを考察。当日の議論では、ロープ(10mm径x60m)をどの程度張っておくべきか、ロープをたるませていなくても体重の静荷重でも4m程度は伸びてしまうのでこの事故は防ぎようがないのではないかなどの意見が出され、皆で考えあった。議論の結果、もっと伸びが小さい新素材ロープの必要性が将来の課題として出されたものの、今できることとしては、(1)落ちないことを目指してはいけない、フリークライミングは落ちながら限界を引き上げていくものだ、それゆえ、落ちる前提でクライミングを行うべき、(2)レポートにあるようにケガをしない落ち方の練習をする、(3)確保者は墜落と同時に後方にジャンプしてロープを目いっぱい張るなどの対応ができるように訓練しよう、との方向で概ねの一致をみた。また、今回のように他の山岳会の人とクライミングをすることは「相手の力量をどう見抜き、何を確認しあうべきかを試されつつ成長するいい機会である。他流試合を有意義に活用しよう」との発言もなさ



れた。

No.3 2017年3月16日14時 MN(男性)58 大阪中央局勤労者山岳会 北六甲山系不動岩
リードクライミング中、終了点でバランスを崩し約10m 墜落した。壁の途中で後頭部を打ち
一時的に意識不明となったため、ヘリコプター
の救助要請をし、搬送された。傷病名は軽度の
頸椎ねんざ。

レポート1枚をもとに議論。事故者本人は落ちたときに「張って」「テンション」などコールをしなかった点を反省点としてあげたが、それでは間に合わないとの意見が強く、議論は確保のやり方へと向かった。確保者は張りすぎない確保をしていたが、今回の墜落6mではロープが自然に3m以上伸びるので確保で流せる距離は殆ど無い。したがってこの場合には確保者は墜落と同時に後方にジャンプしてロープを「引き戻す」しかない。確保者には高度の集中力が必要である。みんなで特段の練習をしようとの方向で大まかな一致をみた。



参加 大阪ぼっぼ会(3) 泉州労山(3) カランクルン(2) 豊中労山(2) OWCC(2)

1名の会は福島労山, 中郵, モンテス, くすのき山遊会, OAR, 志峰会, テンション

計 19名